

濱文庫新収資料「錢玄同致周作人書簡」について： 錢玄同，周作人，中村不折の書をめぐる日中文化交流

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院：教授 | 九州大学附属図書館研究開発室：室員

<https://doi.org/10.15017/1935831>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2017/2018, pp.8-17, 2018-07. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

論文

濱文庫新収資料「銭玄同致周作人書簡」について
— 銭玄同，周作人，中村不折の書をめぐる日中文化交流 —

中里見 敬†

<抄録>

昨年，濱文庫に寄贈された「銭玄同致周作人書簡」は，銭玄同・周作人・中村不折らの書をめぐる日中文化交流を背景とした興味深いものである。『銭玄同日記』の記述により，同書簡は1931年3月，銭玄同が周作人に依頼して購入した中村不折の筆で，お礼をしたためたものだと判明した。その筆は，東京の平安堂が製造した中村不折の用筆「龍眠」であった。中村不折と銭玄同はともに書家として，漢魏の隸書など北派の書に傾倒していた。1939年8月に周作人から濱一衛に贈られた書4点の作者たち（周作人，銭玄同，兪平伯）は，1935年1月5日に周作人邸で濱一衛が面会したことがある学者たちである。周作人は自宅の一室で寄宿を始めたばかりの留学生・濱一衛をすきやきパーティに招いて，自ら親友たちに紹介し，厚くもてなしたのである。

<キーワード> 「銭玄同致周作人書簡」，周作人，銭玄同，兪平伯，中村不折，平安堂，田中慶太郎，文求堂，郭沫若，濱一衛，書，書道，書法，北派，濱文庫，九州大学，Kyushu University Library

Qian Xuantong's Letter to Zhou Zuoren in the Hama Collection of
Kyushu University:
A Case of Calligraphy Exchange between Japan and China

NAKAZATOMI Satoshi

1. はじめに

2017年12月，周作人が濱一衛に贈った4点の書が，濱一衛先生の御息女・藤本康子様より九州大学附属図書館濱文庫に寄贈された。以下の4点である。

- ・周作人「苦茶庵打油詩」其三（擲鉢詩）（1938年）
- ・兪平伯「天津雜詩六首 附跋文」（1930年）
- ・兪平伯「送玄公赴欧州二首」（1931年）
- ・銭玄同致周作人書簡

この4点の書は，留学から帰国後の1939年夏に，濱一衛（1909～1984）が北京の周作人（1885～1967）を再訪した際に贈られたものである。「周作人日記」1939年8月9日に次のように記されている。

晩濱君索旧照片及友人书，以平伯诗二、玄同札一贈之，又予以所书《擲鉢詩》一紙。〔夜，濱君が昔の写真と友人の書を求めるので，兪平伯の詩2篇と，銭玄同の書簡1篇を贈る。さらに自筆の「擲鉢詩」1紙も贈る。〕¹

なお，4点の書については，拙稿「濱一衛先生の思

い出：御息女へのインタビュー 附：周作人より濱一衛に贈られた書4点」において簡単な紹介を行った²。

本稿では，「銭玄同致周作人書簡」に関して，『銭玄同日記』より得られた知見に基づき，前稿の誤りを訂正するとともに，周作人，銭玄同，濱一衛の交流，さらには同書簡に登場する中村不折をめぐる書道史上の背景についても述べてみたい。

2. 「銭玄同致周作人書簡」と直接関連する『銭玄同日記』の記述，およびそれに基づく本文の解釈

「銭玄同致周作人書簡」は18.9×25.3cmの升目刷料紙2枚に墨書されており，本文は以下のとおりである。

（図1参照。図は文末に掲載した。）

名齋再白專齋。足下用中村氏筆，初始作書，固甚苦艱澁。此信即其鍊證也。但弟敢信，用之純熟以後，必有得心應手之快感，此可斷言者。彼時若偽作漢晉書影，私謂必勝于某君之陶詩卷子也。銭玄同又白。「疑/古」印

この書簡と直接関連する記述を，1931年3月2日の『銭玄同日記』に見出した³。（図2）

† なかざとみ さとし 九州大学言語文化研究院教授，附属図書館研究開発室室員（〒819-0395 福岡市西区元岡 744 番地） E-mail: naka@flc.kyushu-u.ac.jp

前托啓明中村不折筆、昨日送来。写魏晋字大佳。
〔以前、周作人に購入を依頼していた中村不折の筆が、昨日届いた。魏晋の字を書くのにきわめてよい。〕(中 791 ; 8: 3991)

この記述から、「銭玄同致周作人書簡」執筆の事情が明らかになった。すなわち、周作人に依頼して中村不折の筆を入手した銭玄同は、さっそくその筆を用いて周作人にお礼の書簡をしたためた。それが本書簡だったのである。中村不折の筆は、「写魏晋字大佳」というように、魏晋の書体、北派の雄渾な書を作成するのにふさわしい筆であった。周作人宛のこの書簡は、3月2日またはその直後に書かれたものと推定される。翌3月3日の日記に、「四時半課畢、乗人力車进城訪啓明。」〔4時半に授業を終え、人力車で城内の周作人を訪問。〕とあることから、3月3日に銭が自らこの書簡を周に届けた可能性もある。

前稿で「中村氏筆」を「中村不折の書体」と解釈、翻訳したのは誤りであり、文字どおり「中村不折の筆」と解すべきである。その結果、全文の解釈を改めて示すと、以下ようになる。

名斎（不詳、銭玄同の書斎名か）より専斎（周作人の書斎名）に再呈申し上げます。初めて中村不折の筆で書を作りました。大変に苦労しました。この書簡がその証拠です。しかし私が思うには、この筆に熟練した後には、きっと思いのままに筆をあやつる快感を得られるであろうと断言できます。そのときにも漢晋の書影を偽作すれば、きっと某君の陶詩卷子にまさることでしょう。銭玄同再呈。「疑古」印

書簡に記載がなく、不明であった執筆時期についても、『銭玄同日記』の記述から、1931年3月と断定することが可能である。

中村不折の筆に関して、「筆匠平安堂」のウェブサイト (<http://www.sho-heiandou.co.jp/history/>) によると、以下のことがわかる。

明治26年(1893)に東京の麹町富士見町で創業した「平安堂」は、明治41年(1908)に岡田久次郎(初代)が本格的に、筆・墨・硯の製造・卸業を始めた。同年12月、「街中でふと目にした中村不折の看板文字に心を動かされていた初代は、試作筆を持って初めて不折を訪ね試筆を願い出たところ、非常に賞賛を受け、先生用の用筆を販売する御許しを受け」、「銘を「龍眠」と命名したという。「この筆の名は中村不折・河東碧梧桐らの書道研究団体「龍眠会」にちなんだもの」である。さらに「大正6年(1917)、当時の三越呉服店に

て平安堂の筆が販売されるようになり、この頃から卸し問屋として事業の安定化に成功したという。

したがって、『銭玄同日記』に「中村不折筆」〔中村不折の筆を購入〕というのは、平安堂が制作した筆に違はなく、それを平安堂あるいは三越などの販売店から購入したのであろう。この時点では、中村不折から直接入手した可能性は低いように思われる。

なお、中村不折の筆、すなわち「龍眠」は現在も平安堂が製造を続け、販売されている。(図3)

洋画家・書家・収集家として著名な中村不折(1866~1943)の略年譜を記すと、以下のとおりである⁴。(図4, 5)

- 1888年 長野県の飯田小学校の教職を辞し上京。画塾・不同舎に入門し、小山正太郎に師事
- 1890年 第2回明治美術会展覧会に水彩画を出品
- 1893年 第5回明治美術会展に出品
- 1894年 正岡子規と出会い、『小日本』新聞の挿絵を担当
- 1895年 日清戦争に子規とともに記者として従軍。これを契機に、書の収集を本格的に始める
- 1897年 島崎藤村『若菜集』の装幀・挿絵を担当
- 1899年 第10回明治美術会展覧会に「紅葉村」を出品。翌年、「紅葉村」はパリ万国博で褒状を受賞
- 1901年 フランスに留学。ラファエル・コラン、ジャン＝ポール・ローランスらに師事
- 1905年 帰国。太平洋画会会員となる。夏目漱石『吾輩は猫である』『漾虚集』の挿絵を担当
- 1907年 代表作「建国勲業」を東京勸業博覧会に出品し、第一等となる。「建国勲業」はのちに「淳化閣帖」(夾雪本)と交換
- 1908年 揮毫帖『龍眠帖』を刊行
- 1912年 河東碧梧桐らと龍眠会を結成
- 1919年 揮毫帖『楷書千字文』『行書千字文』『叢書千字文』を刊行
- 1929年 太平洋美術学校が開校、初代校長に就任
- 1930年 顔真卿「自書告身帖」を購入
- 1935年 帝国美術院会員
- 1936年 書道博物館開館
- 1943年 逝去

3. 『銭玄同日記』からわかること

3.1. 銭玄同の書の修練

国語運動に多大な功績を残した銭玄同(1887~1939)は1930年代、北京大学、北京師範大学で教鞭を執りながら、教育部国語統一籌備委員会の常務委員として、

また中国大辞典総編纂としても活躍していた。漢語のローマ字化を目指し、漢字の廃止を主張した銭玄同であるが、同時に一方では書家として名声が高かった。その素地は日本留学中の若き日の日記から見て取れる。

(1910年1月7日) 毎日拟臨篆、隶、章草三種、章草皇象本《急就章》尚未購得、姑且先以赵氏臨本出之、盖草体写法、首宜练熟焉、每日至少每样必须临一张。〔毎日、篆書・隸書・章草の三種を臨模することにした。章草の皇象本「急就章」はまだ手に入らないので、しばらくの間まず趙孟頫の臨本を手本とする。草体の書き方は、まず熟練しなければならないので、毎日少なくともすべての手本を必ず1枚は臨模しなければならない。〕(上 203 ; 2: 910)

これは22歳の銭玄同が新年の決意を記した日記の一節である。こうして若き銭玄同は毎日のように篆書、隸書、章草といった異なる書体の臨模を行って、腕を磨いたのである。多忙を極めた後年においても、こうした修練は続いていた。

(1930年11月18日) 暇時则练习章草, 以其便用。〔暇なときには章草を練習し、いつでも書けるようにしておく。〕(中 771 ; 7: 3885)

このように学究生活と書の修練が一体となっていた銭玄同が、毛筆などの道具にこだわっていたとしても不思議ではない。西洋画家として出発し、著名な書家・収集家として知られていた中村不折の筆を求めたことも、そのような文脈で理解できるだろう。例えば、銭玄同は大きな筆を特注して作らせたこともあった。

(1930年10月5日) 日前向戴月轩定制特大的狼毫大蒜头笔, 为写对用, 今日往取, 价四元, 似与数年前徐森玉嘱贺连吉仿日本唐笔形式制造之对笔相同(它六元)。〔先に戴月軒で特注していた特大の「狼毫大蒜頭筆」, 対聯を書くための筆ができたので、今日取りに行く。値段は4元。数年前に徐森玉が賀連吉に頼んで日本の唐筆を模して作らせた一対の筆と同じ(そのときの値段は6元)。〕(中 764 ; 7: 3841)

3.2. 北派の書体を重んじる

書道史の教えるところによれば、伝統的に王羲之を初めとする南派の書が重んじられてきたが、阮元の「南北書派論」「北碑南帖論」以来、清末から民国にかけて北派の書体が評価されるようになっていた⁶。日本留

学中の若き日の銭玄同が、康有為の『廣藝舟雙楫』に影響を受けたのも、その流れの中にある。なお同書は日本では、中村不折と井上靈山の共訳で『六朝書道論』(東京: 二松堂書店, 1914)として出版されている。

(1909年3月26日) 上午至神田, 购得康有为《广艺舟双楫》及《大义觉迷录》两书。(中略) 归, 阅《双楫》, 内述隶宗汉, 碑宗六朝及隋, 而卑唐以下。甚好。〔午前, 神田に行き, 康有為の『廣藝舟雙楫』と『大義覺迷錄』の2書を買う。(中略) 帰って『雙楫』を読む。その中で隸書は漢を、碑は六朝と隋を模範として、唐以下を重んじないことが述べてある。すばらしい。〕(上 152 ; 2: 686)

優美な南朝の書よりも、雄渾な北朝の隸書や章草を重視する銭玄同の立場は、後年においても変わらなかった。清末から民国期は、敦煌・トルファンなど西域で出土した新たな墨跡が、書道界の大きな注目を集めていた。以下は展示を見たときの銭玄同の日記である。

(1931年2月7日) 尔后至师大研究所看西北考察团所陈列之器物。天甚冷, 不能多站, 略看即行。一切我都不注意, 惟其中有汉宣帝黄龙即成帝元延时代之木简六匣, 中有极精之章草, 颇觉可爱也。又高昌掘得之墓志数十方, 大半皆写而非刻, 或朱或墨, 有些颇精, 不亚于魏墓志, 有些简直文理不通, 且不成文, 颇有意思。〔それから師範大学の研究所へ行き、西北考察団により陳列された器物を見る。非常に寒いので、長くは立っておれず、ざっと見て立ち去る。すべて注意して見ることはできなかったが、その中で漢宣帝の黄龍(B.C.49)から成帝の元延年間(B.C.12~8)までの木簡6点には、すばらしい章草が見られ、愛すべきものと思われた。高昌で発掘された墓誌数十点は、ほとんどが書かれたもので、刻したものではなく、朱字のものと墨字のものがあり、いくつかすばらしいものがあり、魏の墓誌に劣らない。文意の通じないもの、文章になっていないものもあるが、なかなか面白い。〕(中 786 ; 8: 3968)

従来、書を学ぶ際には、法帖や碑碣に範を求めるのが一般的であったが、この時期から西域より出土した墨跡を印刷に付して、直接見ることができるようになった。中村不折は自ら収集した墨跡を『西域出土墨宝書法源流考』(東京: 西東書房, 1927)として出版した。その緒言に次のようにいう。(下線は引用者による)

支那ノ西域甘肅新疆ヨリ出土セシ古代墨蹟ハ学

界ノ驚異ナリ。(中略)凡ソ書ヲ學ブニ三要訣アリ。其一ハ法帖ヲ臨スルニ在リ。其二ハ碑碣ヲ搜訪スルコトナリ。其三ハ眞蹟ヲ探求スルコトナリ。

(中略) 第三ノ眞蹟ニ就テ研究スルコトハ、理想的ニシテ、正ニ最善最良ノ方法ナリ。其ノ使筆ノ迹歴々トシテ生氣アル所ニ尊重スベキ価値アリ。然レトモ古墨蹟ノ獲易ナラザルハ古来斯道ノ士ノ憂フル所ナリ。(中略)然ルニ今ヤ学界ノ進歩ハ書学ニモ及ボシ、支那邊陲ノ地ニマデ其ノ探求ノ手ヲ伸バシ、甘肅新疆ノ石窟古墳ノ中ヨリ古代墨蹟ノ発見セララル者夥シク、上ハ漢魏ヨリ下ハ五代ヨリ趙宋ニ及ブ。悉ク是レ千年以前ノ尤物、墨痕淋漓トシテ、星鳳ノ翎毛、蒼龍ノ麟甲皆有ラザルナシ。試ミニ其数行ヲ臨スレバ、身ハ魏・晋ノ世ニ生レ、親シク鍾・王ニ書法ヲ聞クノ感アリ。猶此ノ新出土墨寶ガ書学ニ如何ナル關係アルカヲ述ベンニ、或ハ文献上徒ラニ其ノ名ヲ聞クノミニ過ギザリシ古隸章程書ノ如キモノモ、此レニ依リテ其ノ實體ヲ究ムルコトヲ得。

錢玄同の書に対する関心も、まさに中村不折の所説と一致していたことが見て取れよう。

3.3. 周作人と中村不折、郭沫若

錢玄同と中村不折は、上述した当時の書道界の潮流の中に身を置いていた。だが、1931年3月2日の『錢玄同日記』に記されていた周作人を介して中村不折の筆を入手した時点で、両者にどのような接点があったかを具体的に証する資料は見つかっていない。現在確認できるのは、1934年7月から9月にかけて日本を訪問した周作人が、東京で中村不折に面会した事実である。『周作人日記』に以下のように記されている。

(1934年8月18日) 上午田中君来訪、即同往文求堂、約20日午後往訪中村不折君。〔午前、田中慶太郎君が来て、ともに文求堂へ行く。20日午後には中村不折君を訪問する約束をとる。〕

(1934年8月20日) 下午三時田中君来、与耀辰同至上根岸一二五訪中村不折君、观所收藏、以所印汉魏写经一帖见赠。五時歸。(中略)汉魏写经影本 中村君贈〔午後3時に田中君が来る。徐祖正(字は耀辰)とともに上根岸125番地の中村不折君を訪ねる。収蔵品を鑑賞し、刊印した漢魏写经一帖を贈られる。5時に帰る。(中略)漢魏写经影印本 中村君の寄贈〕⁷

周作人は北平に帰宅した直後の9月5日、中村不折に面会したことを錢玄同に伝えた。と同時に、錢に頼

まれて買ってきた筆をおみやげとして渡したことが、『周作人日記』に記されている。

(1934年9月5日) 玄同来談、贈帳筆一支、十時半去。〔錢玄同が来て話す。頼まれていた筆を1本贈る。10時半に帰る。〕⁸

同じ日の『錢玄同日記』には次のようにある。

(1934年9月5日) 晚訪启明、他是二号回平也、他在东京访过中村不折及郭鼎堂也、晚十時半归。〔夜、周作人を訪問。2日に北平に帰ってきたとのこと。東京で中村不折と郭沫若を訪問したという。夜10時半に帰る。〕(下1036; 9:5270)

劉岸偉がいうように、2ヶ月に及ぶ「周作人の訪日は各方面の注目を浴びた。」「日華学会、外務省、東方文化研究所、中国文学研究会などを訪ね、」「朝日新聞、読売新聞、中央公論社、改造社などメディアのインタビュー、取材もたびたびあった。」⁹だが、錢玄同が関心を抱いたのは、佐藤春夫・島崎藤村ら文豪たちとの宴席ではなく、中村不折・郭沫若との面会であった。しかも、周作人の出発前に、3年前に入手した中村不折の筆を再度所望したのである。ところが、錢玄同は周作人がわざわざ日本から持ってきた筆について、日記に何も記していない。3年前には初めて中村不折の筆を得て、その書き心地を「写魏晋字大佳」と記したのだが、今回はそのときほどは感激しなかったようだ。濱文庫所蔵の「錢玄同致周作人書簡」には「足下用中村氏筆、初始作書」(中村氏の筆で、初めて書を作りました)として、筆の第一印象を感激を込めて記していることから、やはりこの書簡の制作時期は、1934年ではなく、1931年3月と見て間違いあるまい。

ここで、周作人を中村不折に引き合わせた田中慶太郎(1880~1951)について簡単に見ておこう。東京本郷に中国書専門の文求堂書店を開いていた田中は、その深い学識により日中の学者の厚い信頼を得ていた¹⁰。中村不折は1914年に「草書経三卷」を文求堂から購入したのを皮切りに、王樹枏(1852~1936、新疆布政使)旧蔵品をはじめとする写経コレクションの多くを田中慶太郎の文求堂を通して購入しているのである¹¹。

田中慶太郎は郭沫若(1892~1978)に対しても惜しみない援助を与えている。当時、日本に亡命中であった郭沫若は中国古代史、甲骨文字の研究に没頭し、田中の文求堂書店から『石鼓文研究』(1933)、『古代銘刻彙考』(1933)、『古代銘刻彙考續編』(1934)、『金文餘釋之餘』(1935)等を刊行した。こうした研究を行うにあたって、郭沫若は収集家の中村不折から多大な恩恵

を受けている¹²。松宮貴之氏は次のようにいう。

その当時の郭沫若所蔵書籍をその文庫目録から見ると、中村不折の手掛けた書の法帖類を多く所有しており、郭沫若は市川に於いて、多彩な書の古典を学び、当時の作品にはそれが反映されていたと言えるだろう。また当時、古文字研究に邁進する中、中村不折所有の甲骨文を利用したことへの謝辞を示す書簡も残っており、その奇縁を裏付けることができるだろう。¹³

同氏の調査によると、『沫若文庫目録』に著録されている書道関係資料には当時、中村不折が続々と刊行していた法帖書論集や孔固亭真蹟法書刊行会の書籍など16種が含まれているという。

銭玄同はかねてより郭沫若の文字学に対する見識を称讃していた。

(1930年11月19日) 近来每于晚间卧榻上看郭氏书, 觉其见识实超卓, 治甲、金文字当以此为正路。我之目的虽与彼不同, 彼重历史, 我看文字, 但治文字, 亦非具此眼光不可也。〔最近いつも夜はベッドで郭沫若の本を読んでいる。見識は卓絶で、甲骨文・金文を研究するには、まさにこれが王道だと思う。私の目的は彼とは違って、彼は歴史に、私は文字に関心があるけれども、文字を研究するには、こうした識見が不可欠である。〕(中 772 ; 7: 3886)

1934年夏の日本訪問において、周作人は田中慶太郎の紹介により中村不折と面会し、さらに田中の世話になっていた郭沫若とも8月14日と17日の二度会ったのであるが¹⁴、その背景には上述したような田中慶太郎をめぐるネットワークが存在していたのである。2ヶ月ぶりの再会で夜10時半まで語り合った周作人と銭玄同の間で、銭の関心の対象であった書に関連して、中村不折、郭沫若との面会が話題に上ったことは実に自然なことであったといえよう。

3.4. 銭玄同と簡体字

ここで銭玄同の国語運動に関する重要事項を年代順に並べると、以下のようになる¹⁵。

- 1919年 「国語統一籌備会」常駐幹事に就任
- 1922年 「減省現行漢字的筆画案」を提出し、「漢字省体委員会」委員に就任
- 1928年 「国語統一籌備会」が「教育部国語統一籌備委員会」に改組され、常務委員に就任

1932年 中国大辞典編纂処の総編纂に就任

1934年 「搜採固有而較適用的簡体字案」を提出

1935年 銭玄同自ら起草した「簡体字表」をもとに、教育部が「第一批簡体字表」を公布

この時期、銭玄同の最大の関心は「簡体字表」の作成にあった。1933年11月19日の日記の一節は、とくに興味深い。

近思生活太枯燥, 必须找一趣味之事调节之, 想来想去, 还是赏鉴书法, 忽将廿年前注意之包、康两家书及《书道全集》中所印之魏碑等取出玩之。实亦与简体字不无关系也。近觉包氏草书功夫极深, 康氏气魄极大, 笔力极雄伟(因彼反对包氏运指论而主张运腕论也), 然至老而一笔不苟的写字, 近世惟沈子培一人耳。康氏恐未能如此忠实也。但论气魄雄伟, 则康又决非沈所能及, 此其所以康为维新钜子, 而沈实为顽固老儒也。〔最近, 生活が無味乾燥なので、楽しいことを捜して調整しなければならぬ。あれこれ考えたが、やはり書を鑑賞するのがよい。ふと思いついて、20年前に熱中した包世臣・康有為の書や『書道全集』に収録された魏碑などを取り出して賞玩する。実はこれも簡体字と無縁ではないのだ。最近感じるのは、包世臣の草書はきわめて熟練しており、康有為は気魄に満ち、雄渾な筆勢である(康氏は包氏の運指論に反対して、運腕論を主張した)。しかし、老いてなお一筆もなおざりでない字を書くのは、近年では沈子培ただ一人である。書に対する真剣さに関しては、康有為もおそらく彼に及ばないであろう。だが、康氏の気魄雄渾に関していえば、まったく沈氏の及ぶところではない。それこそまさに康氏が維新の巨人たる所以であり、沈氏はといえば頑固な老儒にすぎないのである。〕(中 970-971 ; 9: 5001-5002)

仕事の息抜き、趣味として、「20年前に熱中した包世臣・康有為の書や『書道全集』に収録された魏碑などを取り出して賞玩」するのだが、結局のところ「これも簡体字と無縁ではない」、つまり字体整理や辞典編纂といった仕事上の材料捜しをしてしまうというのである。いかにも仕事熱心な銭玄同らしい記述である。

なお『書道全集』とは、日本の平凡社が1930~1932年に出版した全27巻の書籍を指す。鍋島稲子氏がいうように、「『書道全集』に掲載された名品中、中国のものについてはその多くが中村不折のコレクションである。不折は、まずは図版での公開という形で自らの収蔵品を披露した」ことも忘れてはならない¹⁶。

3.5. 日本の書道関係の書籍

1934年12月、銭玄同は『書道全集』の「法華玄黄」を3日かけて模写している。そして、周作人をおして東京の文求堂から「法華玄黄」を購入するよう依頼している。なお、「法華玄黄」が何を指すのか不詳であるが、『書道全集』第4巻の別刷りとして挟み込まれている「譬喻経」（魏甘露元年、中村不折蔵）（図6）を指すのかもしれない¹⁷。そうだとすると、購入を希望したのは、『老女人経零片 譬喻経残 1巻 地黄湯帖 1巻』（孔固亭真蹟法書刊行会、1934）の可能性もある。

（1934年12月26日）因檢《書道全書》中之“法華玄黄”，遂抄之，抄了一点儿，此虽章草，而结体颇与《急就》不同，足见无泥汉章草之必要焉。『書道全集』の「法華玄黄」を調べるついでに、それを書写して、少し書いてみた。これは章草であるとはいえ、その字体は「急就章」とは違う。このことから漢代の章草に拘泥する必要のないことがよくわかる。]

（12月27日）灯下又抄“玄黄”，仍未毕，孔累，孔倦，十一时顷倒头即睡，睡至三时，方醒，始脱衣焉。〔夜、「玄黄」を書写するが、終わらない。ひどく疲れた。11時頃横になるとそのまま寝てしまい、3時に目が覚めて、ようやく服を脱ぐ。〕

（12月28日）上午抄完“法華玄黄”。午回家。午后四时顷访岂明，托其向文求堂购此“玄黄”。〔午前、「法華玄黄」を書写し終わる。昼、家に帰る。午後4時頃、周作人を訪ね、文求堂でこの「玄黄」を購入するよう依頼する。〕（下 1056-1057；9: 5364）

その依頼に対する周作人の返事が、1935年1月25日の日記に記されている。

得启明信，知“法華玄黄”中村不折所印之一部分，其板已毁，颇为遗憾。又知堂云，当向旧书店中访之，但不知可得否也？〔周作人からの来信で、「法華玄黄」は中村不折が印刷に付したものの一部だと知る。すでに絶版とのことで、残念である。周作人がいうには、古書店で捜せば、もしかしたら見つかるかもしれないとのこと。〕（下 1066-1067；10: 5425-5426）

銭玄同は平凡社版の『書道全集』以外にも、日本の書道関係の書籍に注意を払っていた。例えば、1934年9月18日の日記では中島竦が文求堂書店から出した『書契淵源』を称讃しており（下 1038；9: 5283）、1935年5月9日から11日にかけては中村義竹（字は立節）

の『草露貫珠』に関する記述が見える（下 1101-1102；10: 5650-5657）。

4. 周作人をめぐる交友について

最後に、『銭玄同日記』からわかる周作人を中心とした交友について見ておこう。

銭玄同はきわめて頻繁に周作人宅を訪問している。例えば、『銭玄同日記』1931年2月から3月までの2ヶ月間で、2月4日、5日、7日、11日、13日、19日、3月3日、8日、17日、31日の計10回、面会の記録が見える。銭玄同が仕事場としていた孔徳学校の宿舎を周作人が訪ねることもあれば（2月4日）¹⁸、宴会（2月5日）や会議（2月11日）で同席することもあったが、授業や公務、書店めぐりのあとで、銭玄同が夕方に周作人宅を訪問する例が最も多く（3月3日、17日、31日）、ときには夕食をご馳走になることもあった（2月19日）。特筆すべきことに、銭玄同はその後、自宅ではなく孔徳学校に帰り、深夜まで仕事をし、そのまま宿舎で寝るという生活を続けていた。それでも1日1回は必ず自宅に帰り、家族の無事を確認して安心してたという¹⁹。日記にも「晨回府」〔朝帰宅〕、「午回家」〔昼帰宅〕といった記述が、連日のように見える。

銭玄同にとって最大の楽しみは、周作人と本について語り合うこと、また周作人から日本の書店のカタログを借りて、周をおして、あるいは自分で直接日本から本を取り寄せることだったようである。もう一つの楽しみは、周作人宅で友人を招いて開かれるすきやきパーティである。銭玄同の日記には、何を食べたかまったく書かれていないのだが、周家でのすきやきだけは記されている。周作人の妻・羽太信子が振る舞うすきやきの味が、日本留学時代を思い出させたのであろうか。（図7）

（1935年12月26日）四时顷至启明家，他邀食日本之牛锄烧及面，盖其生日也。同座为沈启无、俞平伯、冯废名、陈介白、章川岛也。十时归。〔4時頃、周作人の家に行く。日本のすきやきとうどんでもてなされる。実は週の誕生日だったのである（補：中国では誕生日にうどんを食べる）。同席したのは沈啓无、俞平伯、馮廢名、陳介白、章廷謙（川島）。十時に帰る。〕（下 1166；10: 6030）

すきやき以外に、天井をご馳走になったこともある。

（1936年3月4日）午后觉甚闷，访岂明。晚餐他餉我以日本之天井（テンドン），系干炸对虾煲饭，浇以鯉节卤，极鲜美。〔午後、気が晴れないので、周作人を訪問する。夕食に日本の天井をご馳走し

てくれた。エビを揚げてご飯にのせて、カツオ節でとっただし汁をかける。実に美味である。] (下 1185 ; 10: 6133)

1934年6月に北平での留学を開始した濱一衛は、同年12月1日より周作人宅の一室に寄宿することとなった²⁰。寄宿を開始して1ヶ月後の1935年1月5日、周作人が弟子筋の学者たちを招いて開いた自宅でのすきやきパーティに、濱一衛もご相伴したことが、『銭玄同日記』の記述からわかる。『銭玄同日記』で濱一衛の名前が出て来るのは、この1箇所だけなのである。

(1935年1月5日) 启明昨来信, 约今晚在其家吃日本式牛肉锅, 五时往。同座为平伯、耀辰、冯废名、沈启无及日本人滨(ハマ)某。十时归。[昨日, 周作人から来信あり, 今晚日本式の牛肉鍋を食べに来いとのこと。5時に行く。同席したのは、兪平伯、徐祖正、馮廢名、沈啓无、日本人の濱某。十時に帰る。] (下 1060 ; 10: 5387)

銭玄同は、周作人の友人の中でもとりわけ親しい間柄であったため、周作人の子女の婚約式にも招かれている。

(1935年4月4日) 三时周启明之子周丰一与孙俭志女士亦在来今雨軒订婚, 我与媿同参加也。[(午後) 3時, 周作人の子・周豊一が孫儉志女史と来今雨軒で婚約するというので, 妻(徐媿貞)とともに参加する。] (下 1090 ; 10: 5574)

西村正男・関西学院大教授のご教示によると、周豊一と孫徳志の来今雨軒での婚約時の写真は、『北洋画報』第1231号(1935年4月16日)、および『北農画刊』1935年第4巻第9期に掲載されている。ところが、同年9月20日、孫は腸チフスにより上海で急逝する²¹。一方、周作人の娘・静子については、婚約から半年後にめでたく結婚している。

(1935年10月27日) 今日下午三时, 岂明之女静子与杨永芳在中山公园水榭订婚, 余与媿偕往。秉雄亦往。五时毕再回府。[今日の午後3時, 周作人の娘・静子が楊永芳と中山公園の水榭で婚約するので, 妻・媿貞とともに行く。長男の秉雄も行く。5時に終わり帰宅。] (下 1148 ; 10: 5912)

(1936年4月16日) 午后至荣宝斋, 购一立轴赠周静子与杨永芳结婚。[午後, 荣宝齋に行き, 掛け軸一点を購入。周静子と楊永芳の結婚祝いとして贈る。] (下 1190 ; 11-6171)

最後に引用するのは、授業をもちながら、辞典の編纂を行わねばならない苦衷の心境を吐露する『銭玄同日記』の一節である。

(1935年2月6日) 近日满腹伤感, 颇思辞典处若能弄到一笔钱, 让我得一大学教授之俸金, 专事编纂形音一方面, 而将师大之某职竟辞去, 至少教四小时书, 北大不教, 如此则于人于己两尚有益, 因固定时间当浅近。恐不能矣! 编字典虽用心, 但可以躺卧而为之, 且不拘时间, 较教书为好些也, 但不知办得到否耳? (中略) 精神甚坏, 心绪亦甚坏。

[近頃, 心中悲愴感で一杯である。もし中国大辞典編纂処がお金をやりくりして, 私に大学教授並みの俸給を出して, 辞典の編纂に専念させてくれるのならば, 師範大学の某職は辞して²², 4時間の授業を減らすことができるし, 北京大学の方も教えるのをやめれば, 他人にとっても自分にとっても好都合である。だが(来学期の時間割提出の)決められた時間に近いので, おそらく無理だろう。辞典の編纂は気を遣う仕事ではあるけれど, 寝そべってもできるし, 時間の拘束もないので, 授業をするよりはましである。しかし, そんなことが可能であろうか。(中略) 気力がわかず, 気分も落ち込む。] (下 1071 ; 10: 5454)

5. おわりに

『銭玄同日記』を手がかりとして、本稿で明らかになったことをまとめると、以下ようになる。

濱文庫に新たに収蔵された「銭玄同致周作人書簡」は、1931年3月、銭玄同が周作人に依頼して購入した中村不折の筆で、お礼をしたための書簡である。その筆は、東京の平安堂が製造した中村不折の用筆で、「龍眠」と命名して販売したものであった。中村不折と銭玄同はともに書家として、北派の書に傾倒していた。

周作人が濱一衛に贈った書4点の作者3名、すなわち周作人、銭玄同、兪平伯と濱一衛は、1935年1月5日に周作人邸で面会したことがあった。周作人は自宅の一室で寄宿を始めたばかりの留学生・濱一衛をすきやきパーティに招いて、自ら親友たちに紹介して歓待した。1939年8月の別れに際して、周作人は4年前の宴を思い起こしながら、濱一衛にこれらの書を持ち帰らせたのであろう。

参考文献

- [1] 銭玄同日記(影印本)全12冊, 北京魯迅博物館編, 福建教育出版社, 福州, 2002.
- [2] 楊天石主編, 銭玄同日記(整理本)(上・中・下), 北京大学出版社, 北京, 2014.
- [3] 銭秉雄, “回憶父親: 銭玄同先生”, 銭玄同日記(整

- 理本) (下), 北京大学出版社, 北京, 2014.
- [4] “1939年周作人日記”, 中国現代文学研究叢刊, 2016年第11期.
- [5] 周作人日記 (影印本), 大象出版社, 鄭州, 1996.
- [6] 張菊香, 張鉄榮編著, 周作人年譜, 天津人民出版社, 天津, 2000.
- [7] 劉岸偉, 周作人伝: ある知日派文人の精神史, ミネルヴァ書房, 東京, 2011.
- [8] 顧偉良, “日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想”, 世界の日本研究, 国際日本文化研究センター, 京都, 2017.
- [9] 徐曉紅, “1934年周作人訪日考釈: 以与同仁会的往来為線索”, 周作人研究通信, vol. 7, 2017.
- [10] “平安堂の歴史”, 「筆匠平安堂」ウェブサイト (<http://www.sho-heiandou.co.jp/history/>) 2018年5月6日確認.
- [11] 台東区立書道博物館編, “中村不折年譜”.
- [12] 中村不折著, 台東区立書道博物館編, 僕の歩いた道: 自傳, 台東区芸術文化財団, 東京, 2014.
- [13] 中村不折, 禹域出土墨寶書法源流考, 西東書房, 東京, 1927.
- [14] 中村不折著, 李徳範訳, 禹域出土墨寶書法源流考, 中華書局, 北京, 2003.
- [15] 磯部彰編集, 中村不折旧蔵禹域墨書集成: 台東区立書道博物館所蔵, 文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班, 二玄社, 東京, 2005.
- [16] 鍋島稲子, “不折旧蔵写経類コレクションについて”, 参考文献 15 所収.
- [17] 鍋島稲子, “逸脱と回帰の弁証法: 中村不折を通して見た1930年代の書壇”, クラシックモダン, セリカ書房, 東京, 2004.
- [18] 内藤湖南, “北派の書論”, “書論の変遷について”, 内藤湖南全集, vol. 8, 筑摩書房, 東京, 1969.
- [19] 松宮貴之, “拮抗する二つの(東洋): 明治後期, 新聞・雑誌上における内藤湖南と中村不折の確執をめぐって”, 立正大学大学院文学研究科大学院年報, vol. 19, 2001.
- [20] 李慶国, “郭沫若と文求堂主人田中慶太郎: 重ねて『郭沫若到文求堂書簡』の誤りを訂正する”, アジア文化学科学年報, vol. 8, 2005.
- [21] 高久由美, “郭沫若『石鼓文研究』と日本伝存の北宋安国拓本について”, 国際地域研究論集, vol. 6, 2015.
- [22] 松宮貴之, “民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理”, 郭沫若研究会報, vol. 15, 2016.
- [23] 藤井久美子, 近現代中国における言語政策, 三元社, 東京, 2003.
- [24] 書道全集, 27 vols., 平凡社, 東京, 1930-1932.
- [25] 西村正男, “周豊一の許婚者・孫徳志: その死と音楽活動”, 「『春水』手稿と日中の文学交流: 周作人, 冰心, 濱一衛」国際シンポジウム論文集, 九州大学 QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開, および国際研究拠点の構築, 福岡, 2018.
- [26] 中里見敬, “濱一衛の北平留学: 周豊一の回想録による新事実”, 九州大学附属図書館研究開発室年報, vol. 2014/2015, 2015.
- [27] 中里見敬, “濱一衛の北平留学: 外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態”, 言語文化論究, vol. 35, 2015.
- [28] 中里見敬, “新公開の劉承幹と周作人の日記に見える濱一衛: 兼ねて濱文庫所蔵『春水』手稿本を論ず”, 九州大学附属図書館研究開発室年報, vol. 2016/2017, 2017.

- [29] 中里見敬, 田村容子, 中塚亮, “濱一衛先生の思い出: 御息女へのインタビュー 附: 周作人より濱一衛に贈られた書4点”, 言語文化論究, vol. 40, 2018.
- [30] 潘世聖, 中里見敬, “《春水》手稿後話及周作人、銭玄同、俞平伯詩作信札”, 中国現代文学研究叢刊, vol. 2018, no. 4, 2018.

注

- 「1939年周作人日記」(参考文献4)
- 参考文献29, 30参照.
- 楊天石主編『銭玄同日記(整理本)』(参考文献2)による. 北京魯迅博物館編『銭玄同日記(影印本)』(参考文献1)も参照. 引用の際は, 整理本・影印本の順に巻・ページを記す. 影印本のくずした字体は筆者にはほとんど判読不能であり, 楊天石主編, 閻彤・王燕芝・左瑾・陳盛栄・劉貴福による整理本がなければ, 本研究は不可能であった. 整理本の編纂にあられた各位の尋常ならざる眼力に深甚の敬意を表するとともに, 楊天石「前言」を以下に引用して紹介したい.
銭玄同の日記書写極為潦草・紊乱, 难于辨识, 因此整理工作的第一步是“认字”. (中略) 本书的整理在20世纪80年代开始, 断断续续地进行了近二十年, (中略) 重要原因则在于认读艰难. 我们不愿也不舍得轻易放弃对疑难字词的辨识. 一段文字, 常常在反复阅读、反复揣摩之后, 才能读懂, 这以后还要广泛阅读各种古籍或相关文献, 多方验证, 方敢确定释文, 施加标点. 有些字, 多年不识, 年深日久, 忽然解悟, 相关段落也就豁然贯通. 这时候, 我们真有像发现一颗小行星那样的欢乐. (pp. 4-5)
〔銭玄同の日記の書き方は, くずした乱雑な文字で, 判読がきわめて困難であった. そのため整理作業は文字の「解読」から始めねばならなかった. (中略) 本書の整理は1980年代に始まり, 断続的に20年近く行われた. (中略) その主な原因は解読が困難だったからである. 我々は難読字の解読を安易にあきらめることを望まなかったし, それをいさぎよしとしなかった. 一つの文字列を, 繰り返して読み, 何度も吟味して, やっと理解できるというのが常だった. それからさらに様々な古籍や関連文献に広くあたり, 多方面からの検証を重ねて, ようやく釈文を確定し, 句読点を加えるのである. 何年も解読できなかった文字が, ふとしたきっかけで読めるようになり, 前後の段落がすつとつながる. そんなとき, 我々は小惑星を発見したような喜びを感じたものだ.〕
- 「中村不折年譜」(参考文献11)より抜粋. 中村不折著『僕の歩いた道: 自傳』(参考文献12)も参照.
- 藤井久美子『近現代中国における言語政策』(参考文献23)第2章第6節, pp. 47-52参照.
- 例えば, 内藤湖南「北派の書論」(1911)「書論の変遷について」(1932年講演)(参考文献18), 鍋島稲子「逸脱と回帰の弁証法: 中村不折を通して見た1930年代の書壇」(参考文献17), 松宮貴之「拮抗する二つの(東洋): 明治後期, 新聞・雑誌上における内藤湖南と中村不折の確執をめぐって」(参考文献19)参照.
- 『周作人日記』(参考文献5)下冊 pp. 664-665.
- 『周作人日記』下冊 p. 672.
- 劉岸偉『周作人伝』(参考文献7)「18日本再訪」pp. 212-213. ほかに張菊香, 張鉄榮編著『周作人年譜』(参考文献6); 顧偉良「日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想」(参考文献8); 徐曉紅「1934年周作人訪日考釈: 以与同仁会的往来為線索」(参考文献9)も参照.
- 李慶国「郭沫若と文求堂主人田中慶太郎: 重ねて『郭沫若到文求堂書簡』の誤りを訂正する」(参考文献20)参照.

11 鍋島稲子「不折旧蔵写経類コレクションについて」(参考文献 16).

12 高久由美「郭沫若『石鼓文研究』と日本伝存の北宋安国拓本について」(参考文献 21) 参照.

13 松宮貴之「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理」(参考文献 22) p. 2.

14 14日は周作人が市川の郭沫若宅を訪れ、17日は田中慶太郎宅を訪問した際に、郭も同席した。『周作人日記』(参考文献 5), 『周作人年譜』(参考文献 6) 参照.

15 藤井久美子『近現代中国における言語政策』(参考文献 23) 第4章「漢字の簡略化」参照.

16 鍋島稲子「逸脱と回帰の弁証法: 中村不折を通して見た1930年代の書壇」(参考文献 17) p. 193.

17 中村不折は「譬喻経」について、「此の経、書品典雅、筆勢雄渾である。(中略) 鍾繇の隸書は此の如き面貌風采のものならむと想像される」という(『書道全集』第4巻(参考文献 24), 釈文解説 p. 7).

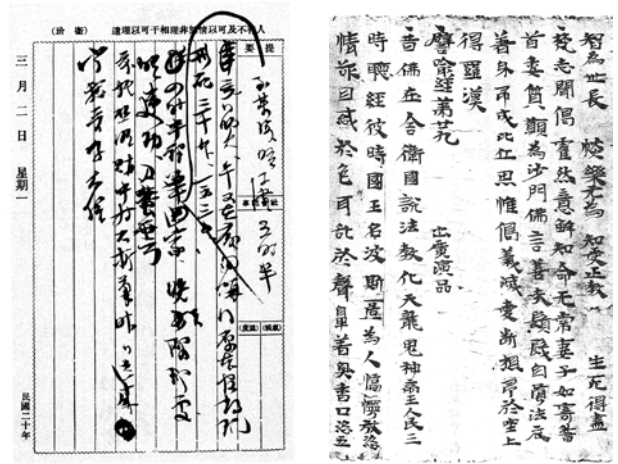
18 銭秉雄「回憶父親: 銭玄同先生」(参考文献 3) p. 1399.

19 注 18 参照.

20 中里見敬「濱一衛の北平留学: 周豊一の回想録による新事実」(参考文献 26), 「濱一衛の北平留学: 外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」(参考文献 27) 参照.

21 西村正男「周豊一の許婚者・孫徳志: その死と音楽活動」(参考文献 25) によると、「孫徳志」は「孫徳志」に作る。孫の生涯については西村論文を参照.

22 当時、銭玄同は北京師範大学の国文系と附属中学で授業を担当していた。「某職」とは、そのうち一方の職、おそらく附属中学の職を辞すことをいっているのかもしれない。



(左) 図2 『銭玄同日記』(影印本) 1931年3月2日

(右) 図6 「譬喻経」(魏甘露元年, 中村不折蔵) (『書道全集』第4巻より, 部分)



図3 平安堂の筆「龍眠」(同社カタログより)

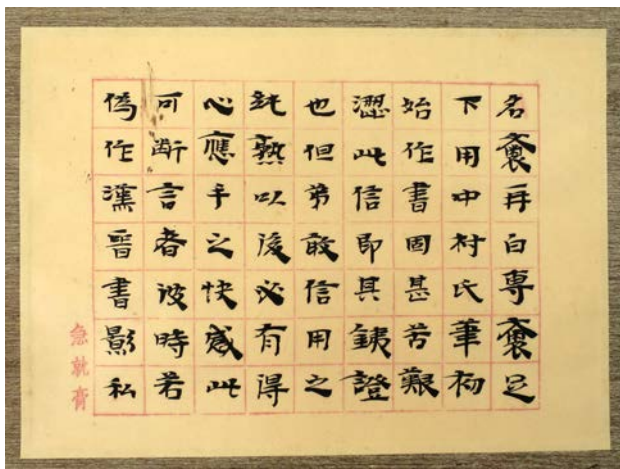
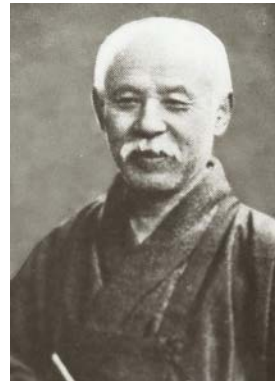


図1 銭玄同致周作人書簡(九州大学附属図書館濱文庫所蔵)



(左) 図4 中村不折肖像(Wikimedia Commonsより)



(右) 図5 中村不折「海岸の三人娘」(1939) 東京国立近代美術館所蔵(Wikimedia Commonsより)



苦雨齋集會, 攝于1920年代。右起: 銭玄同, 苏民生, 徐相正, 沈兼士, 马幼漁, 沈尹默, 刘半农, 周作人, 沈士远

図7 1920年代の苦雨齋(周作人邸)での集まり, 前列右1 銭玄同, 後列左1 周作人, 『銭玄同日記』(整理本) 上より

附：九州大学附属図書館所蔵の中村不折装幀・挿絵の書籍

九州大学附属図書館には中村不折が装幀・挿絵を手がけた島崎藤村『若菜集』（春陽堂，1897），『一葉舟』（春陽堂，1898），『落梅集』（春陽堂，1901），夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』（大倉書店，服部書店，1905～1907），『漾虚集』（大倉書店，服部書店，1906）が所蔵されている。伊藤左千夫『野菊の墓』（俳書堂，1906）は所蔵がない。



(左) 島崎藤村『若菜集』中村不折装幀（1897）表紙
(右) 島崎藤村『一葉舟』中村不折装幀（1898）表紙

夏目漱石は序文に中村不折と橋口五葉の名前をあげて、挿絵と装幀に謝意を表している。



(左) 夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』上編，橋口五葉装幀（1905）
(右) 同書，中村不折挿絵

此書を公けにするに就て中村不折氏は数葉の挿絵をかいてくれた。橋口五葉氏は表紙其他の模様を意匠してくれた。兩君の御蔭に因つて文章以外に一種の趣味を添へ得たるは余の深く徳とする所である。（夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』上編，序）



(左上) 夏目漱石『漾虚集』中村不折装幀（1906）表紙
(右上) 同書所収「倫敦塔」挿絵（左下）同書所収「カーライル博物館」挿絵（右下）同書所収「薙露行」挿絵

不折，五葉二氏の好意よつて此集も幸に余の思ふ様な體裁に出來上つたのは，余の深く得とする所である。（夏目漱石『漾虚集』序）

謝辞

『錢玄日記』の検索・解釈にあたり，華東師範大学教授の潘世聖先生よりご教示を賜った。

図版の掲載にあたり，九州大学附属図書館よりご厚意を賜った。記して感謝したい。

本研究は科研費（16H03405）の助成を受けた。

補説 校了後に入手した中原光『中村不折：その人と芸蹟』（講談社，1973）253～254頁に，「不折用の筆というものは特になかったらしいが，龍眠会の同人，岡田平安堂（本名は久次郎）という人の筆をよく使った。岡田は（中略）二十三歳で九段坂上に筆屋平安堂を経営，（中略）平安堂は龍眠筆を発売，（中略）不折もまた碧梧桐も，平安筆を愛したという」とある。



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて，本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>